

グローバルな中世 問題とテーマ

キヤサリン・ホームズ

小澤 実 訳

はじめに

わたしたちはなぜ、「グローバルな中世」(The Global Middle Ages)と呼ばれるものを考えようとしているのでしょうか。その点について本講演ではいくつかの考えを提示したいと思います。「グローバルな中世」こそが、中世史それ自体に新しいありかたでアプローチするために、そして中世とその他の時代に新しいつながりを作り出すために、大いに可能性を秘めたアイデアだと考える学者も多数います。一方で「グローバルな中世」というアイデアは多くの問題を引き起こすと考える学者もいます。近代史家や近世史家のなかには、地域間のつながりがきわめて限られており成長がみこめなかったものと想定されるこの中

世という時代に、グローバルヒストリーを想定することなど困難であると考え向きもあります^[1]。それどころか、中世史家のなかからすらも懐疑の声が湧きあがっています。

本日の講演でわたしは、この「グローバルな中世」というアイデアの潜在的可能性を指摘することで、肯定的に議論を進める予定です。しかしわたしは、他の学者がこの中世という時代に対するグローバルなアプローチについて抱いている留保条件のいくつかにについても考えるつもりです。最初に強調しておくべきことは、わたしはグローバル史家として今日の論題にたどり着いたわけではないという点です。そうではなくわたしは、一〇世紀から一二世紀のビザンツ帝国という、特定の時代の特定の地域を専門とする歴史家にすぎません。しかしわたしはこの数年

間、五〇〇年から一五〇〇年にかけてのグローバルヒストリーがそもそも意味を持ちうるかどうかを検証することを目指すプロジェクトに関わってきました^②。それは二〇一二年以来継続している「グローバルな中世を定義する」(Defining the Global Middle Ages) というタイトルの助成金プロジェクトです^③。

わたしたちのアプローチ(この点につきましては後ほど立ち返ります)は実験的であり、他者との協力に基づくものでした。このプロジェクトに関わったわれわれは、それぞれ個別特定の地域や下位地域を専門とする研究者からなる集団であり、それぞれの専門とする地理的範囲が一五〇〇年以前の千年間に何を共有していたのか(そしてどこに違いがあるのか)、そしてそれらの地域を何が接続していたのか(そして接続しなかったのか)を理解するために集うことになりました。この意味においてわたしたちは他の時代のグローバル史家にならない、接続(connectivity)のみならず社会間の比較(comparison and connection together)しばしば考えます。とはいっても、無定見に他の時代からの洞察と方法を採用することには十分に注意してきました。他の時代からの方法やテーマはかならずしも中世には当てはまらないからです。実のところ

ろ、われわれのプロジェクトが到達した近年の段階では(共著の執筆も含まれます)、「グローバルな中世」を正しい意味において独自の時代とし、そのいくつかの特徴的な側面を考えるようになってきました。これについては最後に立ち戻ってみましょう。

しかしわたしは以下の点も強調しておきます。つまりわたしたちの結論はいずれも暫定的なものであり、より一層の思考が要求されているという点です。わたしたちはつねにあたらしいアイデアをもとめています。実のところ「グローバルな中世」プロジェクトは、本質的に、世界の様々な地域の「中世」を研究する様々な歴史家、考古学者、文学研究者の間での、現在進行中の対話(ongoing conversation)の一部と考えています。このような探究心の共有が、この新しいアプローチを心躍らせるものとしているのです。そして実際、今日この場にご招待いただき皆さんにお話できることを大変嬉しく名誉なことだと感じています。と申しますのも、わたしがほとんど知らない中世世界の専門家とあたらしい対話を始める機会になるように思われるからです。この点を踏まえてわたしは、いかにして日本の経験、もしくはみなさんをお持ちの中世に関する別の分野の知識が、わたしたちのプロジェクトがこれまで結論付けてきた点を洗練し、場合によっては塗り替える

のか、という点についてまなんでゆくことを楽しみにしています。実のところわたしたちのプロジェクトでは世界中から専門家の協力を得ようとはしましたが、依然として西ヨーロッパと、せいぜい中国研究に集中しているからです。このプロジェクトでは、わたしたちが当初望んでいたほどには、イスラーム世界の専門家の協力を得ることはできませんでした。南北アメリカでカバーできた領域はわずかでした。そして、日本に関心を持つある近世史家（オックスフォード東洋研究所のジェイ・ルイス）を除けば、日本についての洞察は、中国の専門家（とりわけグレン・ダブリッジ）を通じてでした。

一 そもそもなぜ「グローバルな中世」を考えるのか

「グローバルな中世」について考える理由はいくつもありました。そのなかで最もいただけない理由はおそらくグローバルヒストリーの実践がいま流行っているからというものであり、中世史家とりわけ西ヨーロッパの中世史家はそこに遅れをとりたくないからというものです。それよりもはるかにましな理由は、絶え間ないグローバルイゼーションと特徴付けられる二一世紀世界において、過去の時代を扱う研究者は、いまよりも多くの聴衆——それが学者であ

れ一般公衆であれ——に向かって、一見すると近代的に見えるグローバルな現象の起源をどこまで遡りうるかについて伝える義務があるというものです。それと同時にそれら研究者は、遠く離れた過去がいつ、そしてなぜ異なるものとなってしまったのかとの問いに対する注意を引きつけておく必要もあります。「なぜグローバルな中世史を行うのか」というこの問いに対する別の答えは、「グローバルに進むこと」(going global) は中世史家にとって全く新しい探求というわけではない、というものです。私たちの多くがこれほどまでに地域研究に特化した結果、自分が専門とする地域から足を踏み出すこと自体を革新的行為と感じるようになったのは、せいぜいここ数十年のことでしょう。グローバルであるまさに今、わたしたちは一九六〇年代から七〇年代にマーシャル・ホジソンのような先駆的研究者や、八〇年代後半にジャネット・アブー・ルゴドによって試みられた一連の探求成果を拾い集めていると議論することができでしょう。ホジソンの「イスラーム圏」(相互に関連する広域的イスラーム世界)に関する研究も、アブー・ルゴドによるモンゴル帝国の拡大がもたらした中世後期の「世界システム」に関する研究も、一五〇〇年以前をグローバルであるところえるために、もうひとつの力強い理由を喚起します⁴⁾。すなわち、史料に記録された時間の相当程度

のあいだ、西ヨーロッパは相対的に周縁の位置に置かれていたということを、よりはっきりと意識せざるをえないことです。言ってみれば、中世にグローバルな視点を持ち込んだ場合、グローバルヒストリーと関連づけられる様々な現象——緊密かつ活発な交易による接続や広域を支配する諸帝国の生成といった——は、一五〇〇年以前の時期においては、ヨーロッパの外部で起こっていたと理解せざるを得なくなるのです。このような文脈で、わたしたちは初期中世におけるイスラームのカリフ制度を、モンゴル征服後の一三世紀汎ユーラシア世界を、中国製陶磁器が東アフリカのスワヒリ海岸へと輸出されている九世紀以降の中世インド洋世界を考えることができるのです。そしてもちろん、一五〇〇年以前のヨーロッパがかなり周縁的な地位であったという議論は、一五世紀におけるいわゆる大航海時代の性質とインパクトについての重要な問いを提起するのです。このようなたぐいの一連の問いは、近世史家や近代史家に、一五〇〇年以降の世界史におけるヨーロッパの拡大の意義に関して、近世史家や近代史家が行ってきた議論にとつて不可欠といっても良いコンテクストを加えることができるのです。

とはいえ、中世史家としてグローバルな立場に立つことは、必ずしも個々の地域を脇に追いやることを意味しませ

ん。そのような立場選択が意味するのは、特定地域のオルタナティブな歴史を明らかにし展開することを意味しうるのです。西ヨーロッパの場合、グローバルに考えることで、国家と教会組織の成長に収斂する支配的かつ伝統的なナラティブから焦点をずらし、次の問いへと向き合うこととなります。

- (a) どこで、どのような理由で、ひと、もの、思想、信仰、実践、病は移動するのか。
- (b) いかにしてそれらは利用され、もしくは経験されたのか。
- (c) そして、そのような動きはいつどこで決定的に停止したのか。

言い換えると、転移と移動に焦点を合わせるグローバルなアプローチは、一九・二〇世紀における近代ヨーロッパ国家形成プロジェクトの一環として、国家単位のアーカイブの創設をともしつつ構築された、中世研究のために用いられた枠組みを解体する可能性を秘めています。このようにして構築された中世研究は、あまりに長いあいだ、西洋中世史家に対し、ヨーロッパ大陸全体で起こっている社会的、文化的、経済的現象を、極度にナシヨナリスト的か

つ国家主義的な視点で見ると仕向けてきました。グローバルなアプローチは、いまのべた伝統的なアプローチに対し根本から修正を迫る可能性を持ち合わせているのです。(ここで今日の聴衆の皆さんに質問があります。いま述べた点に対するわたしのアプローチは、かなり西ヨーロッパ中心であることを自覚しています。しかし、伝統的なヒストリオグラフィを掘り崩すという点で、日本その他の地域の中世をめぐる近代的研究とのあいだで類似点はあるのでしょうか。このような類似点は、かりにそれがあるとして、その後生起するであろう国家形成プロジェクトを肯定的に捉えてきた解釈を打ち破ることを意味するのでしょうか。さもなければ、比較にせよ接続にせよ、グローバルなアプローチを推し進めることは、西ヨーロッパで行われるケースとは異なるやり方で、日本その他の地域の理解の仕方を変える可能性を秘めているのでしょうか。)

もちろん、移動について考えることだけではなく、もの、思想、ひとがどこで停止するのかについて考えることにより、わたしたちは、地域 (region) ということは何を意味しているのかを問うことを求められます。このような思考方法は、世界の諸地域は本質的に変化と無関係で、時間を超越し、地理条件のみによって決定されるという思い込みを打ち壊すことを可能にします。そのように考えること

でわたしたちは、人間が他の生命や景観とたえず交渉することで諸地域の環境やそれらの境界が形作られるものであり、そうであるとするならば、わたしたちがひとつの地域と認識しているものは時間の経過とともに変化するのかもしれないと理解できます。そしてたとえわたしたちが接続アプローチよりも比較アプローチを好むとしても、ヴィクター・リーバーマンが示したように、異なる前近代社会(彼の議論の対象は東南アジア、ロシア、フランスにみえるユーラシア社会)の間で比較することで、国家形成、信仰実践、アイデンティティ創造といった中世研究における伝統的テーマを捉え直すあたらしい視角を切り開くことが可能になるのです。

しかし「グローバルな中世」を考える最も適切な理由は、書かれたテキストであれ、手に触れることのできるものであれ、景観利用であれ、遺伝子関連物であれ、解釈のために私たちが入手できる資料の分量が膨大であるという点です。ここでは、六世紀インドでその最初の形が誕生し一七世紀までに世界中に模倣物が生み出される、中世におけるチェスの拡散について取り上げましょう。現存するものにわたしたちは目を見張ります。一一世紀エジプトのガラス製駒、一二世紀末の磁州窯陶器の表面にチェスの指し手として描かれる儒学者、仏教僧そして道教道士。ブリテ

ンの視点で言えば、極北のセイウチの牙を材料としてノルウェーで彫刻され、スコットランド西部の島嶼に輸出されたチェスの駒。他方で写本による証拠はチェスゲームが中世世界のいたるところで興じられていたことを伝えます。例えば、一二世紀の『吉備大臣入唐絵巻』に見られる唐を訪問した日本人吉備真備、一四世紀のイルハン朝ペルシアの宮廷人、北ヨーロッパのロマンスに見える淑女たちなどです。カステイリヤ王アルフォンソ一〇世による一三世紀の写本『遊戯の書』にはアラビア語からの翻訳テキストが含まれていますが、そこにはチェス盤を挟んで交流をする、社会的にもエスニシティの面でも多様な指し手が描かれています。「グローバルな中世」を証言するもう一つの顕著な事例は、八世紀から九世紀までにスウェーデンのヘリエーに到達した、四世紀のカシミール製の仏像です。この仏像とともに埋葬されていたのは、イングランド製の司教杖、カロリング製の剣のつか、エジプト製のコプト式柄杓、地中海産の銀製皿です。もう一つの中世北欧の交易地であるビルカでは、ビザンツ、アッバース朝、中国産の絹織物が、紅海やインド洋のコヤスガイを材料としたビーズやペンダントとともに発見されています。これら初期中世の事例に加えて、黒死病による全ユーラシアに対するインパクトという後世の事例もあげておきましょう。そして、

クリストファー・コロンブスという人物そのものが、トランスリージョナルな、ことによるとグローバルな歴史を背景とする中世世界の所産であると論じられてきたのです。

以上は一五〇〇年以前の、遠く離れた世界の間での相互交渉と共通経験の顕著な事例ですが、決して孤立した事例ではありません。ここでわたしたちは中国西方の敦煌周辺の洞窟群で発見された何千もの文書と織物も思い起こすべきでしょう。それらは紀元千年頃のユーラシアにおける多種多様な民族がなす共同体、移動、相互交渉に光を当てています。もしくはゲニザとして知られる、カイロの旧市街のシナゴグで発見された一〇〇万以上のテキストの断片です。そのうちの多くは一〇〇〇年から一二五〇年頃にさかのぼるもので、ユダヤ商人の広範囲にわたるネットワークを利用した活動を証言しています。また、シリアからタングニア、さらにはインドネシア、場合によってはオーストラリアに至るまでの考古学的発見で見出される、何千もの中国製陶磁器の破片もです。もちろんこれらすべての証拠は、現物もしくは写本としてのこっているものという、触ることのできる世界に属するものです。ここに叙述、物語、歴史、寓話の移動といったような触ることのできない道具立を付け加えた場合、潜在的な証拠群は今よりもはるかに多くなります。残っている証拠と以下のプロセス、つ

まり、人間とリソースが移動することで、意味を生産し、移動させ、分有して、現存するものとテキストへと変化させるそのプロセスとの間での複雑な人間の諸関係を考えようと、証拠群は一層増加するのです。

馴染みのない言語や文字、文化形態といったテクニカルな問題のせいで、そうした原資料の精査解釈がなお一義的には各地域の専門家に委ねられねばならぬとしても、この事実自体、残存する「史料の」量が膨大であることの証拠だと強調できます。より重要であるのは、二一世紀に情報伝達手段が発達したこともあいまって、専門家ならざる聞き手の注意を引き、そうした人たちに説明することが多くなってきているように思われることです。同様に重要であるのは、そのようなマテリアルが、たんにそれ自体の生産や受容のコンテクストについてというよりもむしろ、前近代世界を跨ぐコミュニケーションについて我々に語りうることについての研究が増えてきていることです。そして、敦煌やゲニザのような単一の場所で発見された尋常ではない分量のマテリアルだとしても、中世世界全体を見渡せば、ローカル、リージョンナル、スーブラリージョンナル、惑星規模といった異なる地理スケールでの人間の相互交渉や連携を調査するに足る、非常に豊かな証拠が存在することは明らかなのです。マイクロならびにマクロレベルでの比較を可

能にする証拠もまた膨大です。そしてここで私は一旦立ち止まり、グローバルなアプローチを採用することは空間的にも時間的にも大きなスケールで考えることだと言いつつ、ことを強調しておきます。だからといってそのようなアプローチは、惑星レベルや度を越した時間幅で考えねばならないことを意味しているわけではありません。そうではなく、ローカルなレベルでもグローバルなアプローチをわたしたちは利用しうるのです。実のところ、水曜日におこなったもう一つの講演では、グローバルヒストリーの道具立ての幾つかを用いることで、私の専門であるビザンツ政治史の研究に、いかにして新しい探求の道筋を提示することができるのか、その可能性を示そうとしました。さらに自分に引きつけた場合、わたしは、行政区分上はイングランドの東端にある（そこから先へ向かう道路はありません！）、イーストアングリアの出身であることを注記しておくべきでしょう。しかしこの地域の中世史も近年は、グローバルなアプローチの元にさらされているのです。つまりネーデルラント、ドイツ、そして北海の対岸にあるスカンディナヴィアにおける諸地域との長期間にわたる接続に対し、興味深い光が投げかけられたのです。

取り組むべき大変多くの証拠があるにもかかわらず、比較もしくは接続という方法で中世をグローバルに捉えると

ころへ一歩踏み出す前に、注意深く進める必要がなおあることにわたしは触れておきましょう。ちよつとした事例でわたしの考えを説明しておきます。

ここでとりあげるのは九世紀の南インドの事例です。八四九年にさかのぼる、ケーララ州コツラムという港湾都市に残る六枚の銅版銘文に関連します。ビザンツ史家であるわたしはこの証拠について全く知りませんでした。教えてくれたのは、レスターのデモンストフォート大学に籍を置くインド洋物質文化の専門家であり、われわれのプロジェクトの一員でもあるエリザベス・ランブーンでした。彼女はイギリス政府の助成金を得て、二つの特権内容を記録するこの銅版に関する研究プロジェクトをすすめています。ひとつは二つの商人集団にたいする一連の交易特権に関わるもので、一方の集団は南インド土着であり、他方は西アジアに利害を持つものでした。もうひとつの特権は、ペルシャすなわち東方ネストリウス教会にたいする寄進にかかわるものです¹¹。二つの特権はいずれも法的にその署名者たちを結びつけています。いずれも四つの言語（タミル語、アラビア語、中世ペルシア語、いまだ特定されない北インドの言語）と五つの文字（ヴァッテルットウ文字、デヴァナガリー文字、アラビア文字、パフレヴィー文字、ヘブライ文字）で記録される複合的要素をもつものです。二

つの特権が証言するのは、五つの世界宗教の代表者（ヒンドゥー教徒、イスラーム教徒、キリスト教徒、ゾロアスター教徒、ユダヤ教徒）がコツラムに集い、そこで協力したということでした。この証拠は、それ以外の考古学資料や文献資料に基づいて描き出された、コツラムのような港湾都市における数多くの文化を超えた出会いを生み出す、九世紀から一〇世紀の活気に満ちたインド洋交易世界という大きな図柄を裏打ちしています。これは、前近代にたいして通例想定されるよりはるかにスケールの大きい、もうひとつ上の段階の相互交渉の世界といえるでしょう。

しかしコツラムの銅版は、一体どのような意味でグローバルなのでしょうか。ヨーロッパ人がインド洋に直接展開する六〇〇年ほど前に、人どもの国際的な交換があつたことの証拠として、素直にここの銘文をとらえるべきなのでしょう。あるいはそうすることで、正当化の説明抜きにグローバルヒストリーのグローバリゼーション・モデルを推し進め、この同時代資料に現実描かれる社会的、宗教的、経済的な遭遇と交換のプロセスを歪め、誤解させてしまうのでしょうか。実際、遭遇や交換などといったグローバルヒストリーの用語でこれらの銅版を解釈することが正当化されるとすれば、どのような意味においてなのでしょう。それとも、署名者がこのような関係の多くを、遭

遇 (encounter) と交換 (exchange) によって示唆される明確な二者観点で考えてこなかった、そうではなくて協力 (cooperation) というさほど強くない観点で考えていたようにみえるとすれば、わたしたちは、これらの文書が映し出す経済的、社会・文化的関係を扱うために、それに対応する別の概念を必要とするのでしょうか。そうであるとすれば、アラビア語で文書を書くものはイスラーム教徒とキリスト教徒の交易者双方全体を、中世ペルシア語で文書を書く者はキリスト教徒とゾロアスター教徒を代表していたようにみえます。その他の点でも、いくつもあるグローバルの定義がもたらす様々な観点にしたがって、これら銅版を解釈するのは容易ではありません。フォーマル、インフォーマルを問わず、帝国 (empire) の存在についてこれらの銅版に証拠を見出すことはできません。いずれにせよ、これらの銅版は、これら商人の「教会」に対して土地と特権を与える「ローカルな」領主の権力について、従来以上に焦点を合わせるべきであることを示唆しています。

この事例が意味しているであろうことは、グローバルヒストリーを追求する中世史家が直面する数多くの問題があるということです。

(a) コッラム銅版、ゲニザ文書、敦煌文書のような複合的

要素を持つ対象に、学者個人としてリサーチを進めることができないのはあきらかです。写本の解読者でもあり考古学者でもあるという複数の才能に恵まれたランブーン博士ですら、コッラム銅版の研究には、複数の専門家によるチームで当たる必要があります。

(b) 中世の長距離連結をはっきりと指摘する証拠ですら、帝国や遭遇といったグローバルヒストリーで通常用いられるカテゴリーの先を考える必要があると、わたしたちに注意を喚起しているのかもしれない。それは他方で、全てを架橋しようとする単一のグランドナラティブ、とりわけヨーロッパの拡大に焦点を合わせるナラティブを放棄することを意味しているのかもしれない。

(c) もちろん、中世の諸現象は、一五〇〇年以降のヨーロッパ権力の拡大を特徴付け、場合によっては、一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのヨーロッパによるグローバルな規模での支配を可能にしたかもしれないプロセスと構造と同じように見えるかもしれません。このような現象は、それが出現した以降よりも以前に目を向けた場合、古代帝国の解体もしくは、ポスト古代における、イスラーム教、キリスト教、仏教といった「世界」宗教の拡散に出发点を持つ展開の表れであるのかも

れません。しかしわたしたちが中世グローバルヒストリーを構築するために依拠する証拠は、その他の多くの解釈や見通しに対しても開かれていなければなりません。

二 概念の挑戦と研究プロジェクト「グローバルな中世を定義する」

わたしたちが二〇一二年にイギリス政府の助成金に応募した時、「グローバルな中世」を「実行する」(do)ではなく、グローバルな中世を「定義する」(define) という表現をなぜ選んだのかは、以上述べてきたようにいくつかの不確かさによって説明できます。本質的に、わたしたちがグローバルな中世を「実行する」のに着手する前に、この抽象的な考えそれ自体のもつ可能性と射程について、そしてその陥穽と問題についても少し学んでおきましょう。

わたしたちがこのプロジェクトを設定するにあたってそのバックボーンとした概念思考についてももう少し述べておきましょう。初歩段階で感じていたのは、他の時代について作業する歴史家に対して、非常に多くの取り組むべきべき資料が存在していることを知らせる必要があったことです。これを別の表現に置き換えますと、わたしたちは中世

史家として、急激なグローバルな統合が、一五〇〇年以前の時代における、すべての人間が居住する地域の間でおこったと主張することは必ずしもできないにせよ、ヨーロッパの拡大以前の時代の世界をグローバルに探求しうる資料が間違いなく手元にあることを示さなければなりません。わたしたちはまた、そのような探求が、比較の観点からのみならず、接続——そのうちのいくつかは大変な長距離での——の道筋を示し説明することでアプローチすることも可能だと感じています。

わたしたちが明らかにしたいもう一つの考えは、別の時代で適用されたもののうち、どのようなグローバルなアプローチであれば、五〇〇年から一五〇〇年という時間幅に対して最も有効に機能するのかという点です。このため、わたしたちは以下のテーマについて考えることに最初のワークショップをささげました。

(a) 「大分岐」と将来のヘゲモニーの根源^②

このような種類の分岐というアプローチを長らく議論してきたのは、近代や近世のグローバル史家や古代史家でした。中世ヨーロッパのなかに後世の成功を生み出す構造を見いだす人すらいました。われわれ地域ごとの専門家集団としてこのアプローチに目を向けた場合、それはかなり

の程度目的論的であり、中世に関してグローバルとは何かを説明するための可能性を制限することになります。さはいえ、われわれのプロジェクトのメンバーの一人でもある経験豊かな西洋中世史家ロバート・I・ムーアは、一一世紀におけるラテン・ヨーロッパとユーラシアの他の世界との間に「最初の二分岐」が生じたのだと論じてきました。もともとムーアは、一一世紀を「二分岐」と捉え続けてきました。近年、最初の「大いなる多様化」というソフトウェア表現をとるようになりました。わたしたちの研究グループが繰り返し指摘したのは、いくつかの不一致はあるにもかかわらず、「グローバルな中世」に対するわたしたちの見方は、「分岐」という概念に基づいて予見することはできない点でした。その理由は、現実上の問題として他の時代において、「分岐」という概念でしばしば西ヨーロッパと中国に対してのみ注目が集まることになり、両者の間に位置する他の地域（東アジア、南アジア、中央アジアのステップ地帯、アフリカ、南北アメリカ、太平洋など）を調査していないまま放置していたからです。

(b) 帝国

「帝国」は、グローバルヒストリー研究としばしば結びつけられるもう一つのアプローチであり、わたしたちの初期のワークショップの一つでも検討した課題でした。この

アプローチは、「分岐」よりもより中世にふさわしいテーマである可能性を持つていて感じています。それにもかかわらず、中世諸社会の多くにとつての「帝国」は、近代や古代の諸帝国の研究において通常そうであるほどには、形式的でもなければトップダウン型の行政的でもないと考えざるを得ない概念だと感じていました。そうではなく、わたしたちの見方は、「帝国」とは、社会における様々な政治層の間での調停やコミュニケーションの多様な形という観点から（とりわけローカル・エリートは帝国の支配者層と被支配者層との間の調停を行うのです）、もつと考察される必要があるということです。とは言っても、わたしたちのどれもが合意したのは、この時代の「帝国」についての別の考え方も存在するという点です。とりわけ、それ以前の帝国から継承したり、隣接する帝国政体から借用したりしたものを含む、帝国イデオロギーへの比較アプローチを採用した場合には、です。このようなコンテキストで、プロジェクトメンバーの何人かは、ヴィクター・リーバーマンが著書『奇妙な類似』で展開した「チャーター政体」(charter polity) という考えが、それぞれの専門とする地域において追求するに値する興味深い入り口になりうるかもしれないと思つたのです。そしてこの「チャーター」(charter) という言葉によって、現行政治体を権威化する

ために、それ以前のイデオロギーを再利用することを意味するのであれば、それはわたし自身が馴染んでいる世界にまさに直結するアプローチなのです。つまりビザンツ帝国と、そこに地理的に隣接するノルマンシチリア王国、ブルガリア王国、ルーシ国家といった多くの諸国との関係なのです。しかし、この「チャーター」という考えは、サハラ以南のアフリカや初期南北アメリカのようなさほどの文字文化を生み出さなかった地域の専門家からは十分な支持を得ていません。このような観点から見ると、先行政体におけることで現行政体を権威化することは、いくつの中世の地域に対しては採用するに値するアプローチとして立ち現れますが、それはかならずしも、純粹に「グローバル」と言って良い中世的現象とは限らないのです。

(c) 時代区分

わたしたちが一步先に進み、グローバルな中世を「実践する」以前に考えておかねばならないもうひとつの問題は、時代区分 (periodisation) という厄介な論点です。わたしたちの試みは「グローバルな中世」と呼ぶことができるのでしようか、それとも「中世の」(medieval) や「中世」(Middle Ages) といった用語はただただヨーロッパ中心主義であるために正当化も利用もできないのでしょうか。「中世」(西ローマ帝国の崩壊とヨーロッパ・ルネサン

スの間の時期) によって示唆される時代区分は、その他の地域の歴史を歪めようとしているのでしょうか。そのような他の地域に対し、ヨーロッパ中世の持つ、封建制や排他的な一神教といったようなステレオタイプの特徴を課すとすれば、歪めることになるでしょう。その特徴は、ヨーロッパ中世ですら共有していなかったかもしれないし、ヨーロッパ史家ですらいまやヨーロッパに対しても疑問を抱かざるを得ないものなのです。もしくはそれらは、これらの地域では意味をなさないやり方での時代区分を設定することで、他の地域の歴史を歪めようとしているのでしょうか。時代区分の大まかな下限として一五〇〇年を孤立させることは、わたしたちを、すべての地域の比較と接続が一五・一六世紀ヨーロッパによる大航海時代の観点からなされつつあるという見方へと誘うのでしょうか。そしてそのことは翻って、我々が関心を持つ単一のグローバルヒストリーとはグローバルバリエーションの前史であることを示唆しているのでしょうか。もしくは「中世」を用いることは、ヨーロッパと北アメリカによる抑圧的でコロニアルな見方と共犯関係にあることを意味すらしているのでしょうか。このような一連の批判によれば、迷信にあふれ、後進的で、非合理かつ停滞的な「中世」という考えは、そのような特徴をマッピングすることのできるコロニアルな主題が存在

して初めて立ち現れるのです。そして我々のうち、「中世」を便利でニュートラルな用語としてのみよるこんで受け入れている者でも、「中世」という用語は、五〇〇年から一五〇〇年のヨーロッパ史を叙述するために用いられる場合ですら、問題含みであると判断している西洋中世史家がいることは承知しているのです。ほとんどの西洋中世史家は、「中世」を単体でもちいるよりも、「初期」(early)、「盛期」(central/high)、「末期」(late)を付した「中世」を好むでしょう。

このように時代区分は簡単な問題ではありませんし、少なくとも最初に議論をする必要があると感じられる問題でもありません。それにもかかわらず、このトピックに関するワークシヨップが終了したのち、われわれのほとんどは、ニュートラルなやりかたで用いられる限りにおいて、「中世」という用語を利用して良いのではないかと感じました。別の言い方をしますと、語法上の議論が続ければ続けるほど、逆説的ながら、ヨーロッパの歴史とヒストリオグラフィーに関する、きわめてヨーロッパ中心主義的な議論によりいっそう囚われてしまうと感じ、そしてその用語の中にあるより純粹かつ得るものが多いグローバルな側面において、他の地域と関わるのが困難になってくるように感じるのです。ということもあり、説得的で代替可

能なラベルを見つけることができるまで、私たちは「中世」にこだわりつづけ、その一方でその起点と終点についてはフレキシブルであろうと考えています。その結果としてわたしたちのプロジェクトメンバーは、五〇〇年よりも三〇〇年について、一五〇〇年よりも一六五〇年について語ることを好むのです。そのように言ったとして、わたしたちは「中世」に縛り付けられるものではありませんし、本日の聴衆の中でより良いアイデアをお持ちの方がいらっしゃるかもしれません。お聞かせ頂きますと大変嬉しく思います。

三 方法と新しいアイデア

以上述べてきましたように、われわれのプロジェクトは、「グローバルな中世」と題したアプローチに対する反論を意識してきました。しかしわたしたちは、問題を克服できないわけではなく、比較と接続をつうじて世界の異なる地域に目を向けることで、「中世」が包摂する時代についてより多くを学ぼうとするこのプロジェクトは、知的興奮に満ち知的に大胆であると考えています。そして、実のところ、われわれのワークシヨップが進展するにつれて、近代史家や近世史家からの批判に心を煩わせることをわたした

ちはやめました。そして、「中世」における経験は他の時代の専門家が用いる分析カテゴリーと交換可能なものであるのかどうかといった点についてはさほどの関心を払わなくなりました。そのかわり、「グローバルな中世」プロジェクトの一つの到達点は、中世世界それ自体の時間幅で意味を持ちうるテーマは何であるのかを特定し、それに対応する新概念を推し進めることではなければならないと確信するようになりました。

「グローバルな中世」というさしあたりの概念の中心にあるのは、ワークショップを通じてわたしたちが採用してきた、協力して作業を進めるという方法 (collaborative working method) です。単一地域のパスペクティブの支配を克服する助けとなり、それに対応する新概念を推し進めることを可能にするのはこれしかなかったのです。わたしたちのやり方は幾つかの点で馴染みのあるものです。ワークショップにおける短いプレゼンの利用、ラウンドテーブルによる長時間の議論、プロジェクトメンバーの間でのインフォーマルなコミュニケーションのための一時中断です。しかしいくつかの追加要素がこれまで馴染んできた要素をより効果的にするのです。われわれの場合、報告者の専門は常に地理的に広範囲にわたり、その結果として、プロジェクト参加者の多様で幅広い関心に基づく、比較と

対照を追求することが可能となりました。何を言いたいかと申しますと、わたしたちは、プロジェクトの当初から、アフリカならびに南北アメリカと議論を統合していたのです。こうした非ユーラシア地域の存在はまた、われわれ研究グループに、ユーラシア地域のパスペクティブでは自明であり、議論する価値がないと思われる事柄について、再考を求めることになりました。たとえば、「文化を記録する」のワークショップでは、われわれの多くは、「書くこと」(writing)、「記録」(record)、「書かれたメディア」(written media) といったような専門用語でわたしたちが意味しているものについて一生懸命考察するものだと思いがちですが、アステカ文明を専門とし、アメリカ大陸の専門家である同僚にしてみればこれはプレッシャーでした。彼女が指摘するように、われわれの多くが織物 (fabrics) としてただ捉えがちである北アメリカの織物 (wampums) は、それを製作するひとにとっては書くことの一つの表現なのでした。同じワークショップでわたしたちの心をかきたてたのは、マシュー・デイヴィスが語る、この地域の景観というコンテキストのなかでのモニュメントの調査を通じて、「記録」という概念にアプローチする、中部ならびに東部アフリカ地域の考古学者らについてでした。このことが特に重要となるのは、従来型の文字記録が

中世のこの地域では欠如しており、そのことが、この地域は意味ある歴史を持つていないとの考えに達した場合においてです。同様に重要であるのは、このプロジェクトに非ユーラシア地域を専門とする歴史家や考古学者を含んでいるという事実は、文字記録と同様にものにも、エリート文化だけではなく非エリート文化にも大きな注意を払っていることを意味することです。われわれの実験は、グローバルに通用するテーマにとつての経験であり、原則、極度に西部ユーラシア的である専門用語と仮定を作り変える必要が常にあります。われわれの方法にとつてもうひとつの鍵となる要素は、われわれのグループへの積極的な参加者の誰もがその考えを定期的に披露してくれたということでした。これが意味するのは、数年にわたって、わたしたちはダイナミックで持続的な対話を推し進めたということであり、その結果として、時間が経過するにつれて、われわれの誰もがさらなる知的なリスクを負い始めたのです。われわれは今どこにいますか。そう、われわれのほとんどは、われわれ自身の地域の中世史が、かつてよりトランスリージョナルでグローバルなレンズを通じて見られていたとすれば、かなり異なるように見えうると考え始めている、そのような地点に到達したのです。そのほかに何もなかったとしても、それだけでも心掻き立てる展開

です。しかし、わたしたちはその地点よりももう少し先へ進まねばならないと思います。中世のグローバルヒストリーは、「中世」という用語（古代と近代の中間の時代として、もしくは近代のネイション構築活動の結果としての人工的構成要素として）の持つ極度にヨーロッパ中心主義的な負荷があるにもかかわらず、中世研究に対して、そしてより一般的にはグローバルヒストリーに対して新しい問題や概念を切り開く能力を備えています。わたしたちは「グローバルな中世」を他の時代との競合という観点から見ているわけではありません（「あなたがたが考えるよりも早くグローバルな交易があったのです！」）。そうではなくてわたしたちは、それ以前それ以後の時期への重要な連続性が存在する場であると認識しながら、「中世」をそれ自身の観点から語るに値すると考えています。

そうであるとすれば、「グローバルな中世」を「それ自身の観点で」どのように語るべきなのでしょう。わたしたちは、「グローバルな中世」を決定する構成要素とは何であると考えているのでしょうか。われわれのプロジェクトメンバーは、新しいグラントナラティブを描き出すにはまだ未成熟で、そしておそらく望むべきではないと、さしあたりは考えています。しかし、われわれにとつて意味を持ち得ているように思われるいくつかの論点があります。

その論点のひとつに、五〇〇年から一五〇〇年という期間のグローバルヒストリーは、その始点終点よりも離れた過去と連続している部分が入り混じっており、不可避のことごと——とりわけヨーロッパの拡大——を前提とすべきではないという判断があります。このことは、社会的、政治的、経済的組織と相互交渉に関するあらゆるかたちでの千年にわたる実験でした。もっともこの実験の多くは、失敗した「助走」となったようでもあります。それは連結が多層化かつ増加する世界であり、不安定と逆転が付きまとう世界でもありました。たとえば、断絶という観点から、わたしたちは、ヴァイキングのグリーンランドとその先の世界への拡大や、グリーンランド西部におけるヴァイキングの存在の消滅を考えることができます。五〇〇年から一五〇〇年にわたる時期に、接続は、ローカルであれ地域レベルであれ長距離であれ、その程度も密度も高まってくることを見て取ることができます。このことは長期にわたる変化であり、それは、時間が経過するにつれて、実験的試みに関する限りにおいて、とりわけ少なくとも世界のいくつかの部分において宗教上の選択を行うという実験的試みに際して、上から操作する余地が少なくなっていくことを意味していたのかもしれない¹⁹。

以上すべての仮説は一般理論にすぎません。それらはい

ずれも、トランスリージョナルなレベルで、ローカルに設定された環境下で検証を受けねばなりません。そうした仮説の多くは、今後詳細なケーススタディを経た場合、疑問視され、場合によっては却下されることが予想できます。わたしたち自身は、このプロジェクトのうち、対応する概念の部分についてはかなり多くのことを考える必要があります。そうした作業のうちある程度は、わたしたちが共同で執筆した『グローバルな中世』(The Global Middle Ages)で行われるでしょう。またこうした作業のうちある程度は、わたしたちそれぞれが、自ら専門とする地理空間においてそうしたグローバルな考えを押し広げるにつれて、進められるでしょう。しかしわたしは本日の講演を、やや驚くべきことですが、われわれのどれもが有用であると思えた対応概念について考えることで結論としたいと思います。その概念とは「ネットワーク」(network)です。わたしたちはこのテーマを取り上げたワークショップを開くまで、この概念は中身がなく使われすぎているため、全く役に立たないだろうと考えていました。そうであるとすれば、なぜ「ネットワーク」が、グローバルな中世史家の分析道具箱の中でこれほどまでに重要な概念であると証明されたのでしょうか。

四 結論：「グローバルな中世」における「ネットワーク」の重要性

ワークショップの一つのテーマはネットワークでした。わたしたちの多くは、他の時代のグローバルヒストリーを専門とする歴史家によって頻繁に用いられる用語であるネットワークの探求に熱心でした。それはわたしたちの役に立つのでしょうか。わたしたちがワークショップを始め時にはいくらかの不安があったと言っておかねばなりません。「分岐」(divergence)とか「帝国」といった他のグローバルヒストリー概念の有効性が限定的だとして、「ネットワーク」はわたしたちの手助けになるのでしょうか。結局のところ、それは高度に理論化されたとは言い難い用語であり、かなり異なる諸現象に対して、手抜き短縮表現として用いられていたのです。たとえばネットワークを「移動」(movement)や「流出」(flow)の意味で用いていた歴史家もいたようです。そのような学者が意味していたのはどのような種類の「移動」でしょうか。ひと、もの、思想、それともそれら全てを合わせての「移動」なのでしょうか。デイヴィッド・ベルが指摘したように、「ネットワーク」のような用語の持つ分析力は、それが「流出」を意味するためにのみ用いられた場合、非常に弱くなります。し

かし、「ネットワーク」は主として「移動」についてのものだという考えで満足したとしても、危険性が消えるわけではありません。²⁰このような意味づけは、非常に狭い意味でのグローバルヒストリー、つまり主として長距離交易や移動についてのグローバルヒストリーにわたしたちを誘い込みかねず、それは、とりわけいかなる中世社会にとっても非常に重要な、極めて地域を限定したレベルでの、あらゆる種類の社会的、政治的、経済的、文化的活動を見落としてしまうのです。おそらくはこの周辺に道があるのです。結局、中世史家を含む歴史家は、人間集団の内部もしくはその間での繋がりがいかにして作り上げられたのか、そして非常にローカルなコンテキストでいかにして権力が創造され機能するのかについて考えるにあたって、社会学から借用した諸概念を用いる場合特に、「ネットワーク」という用語をこれまで適用してきました。ここで私が思い起こすのは、中世後期イングランドの地域ジェントリ社会に関する数多くの研究、²¹パジェットとアンセルによる一五世紀フイレンツェにおけるメディチ家の研究、²²そして近年で言えば、私の同僚であるヒルデ・デ・ヴェールトによる宋朝の文人官僚間のネットワーク研究です。²³さはいえなお問題は残ります。このアクターの相互連結を意味するために「ネットワーク」を用いることは、極めて小規模なローカ

ル社会や小規模政治エリートを研究することに慣れている私たちにとっては比較的都合が良いことは確かですが、このような「ネットワーク」という用語の利用を、わたしが先ほど概要を示した、旅・交易・移動という意味にリンクさせることはそれほど容易なでしょうか。すくなくとも、「ネットワーク」が数多くの非常に異なる意味を潜在的に含んでいるという事実は、「グローバルな中世」のようななお手探りにある対象を研究するに際しては、この「ネットワーク」の意味をあまりにルースで不正確なものにはしないででしょうか。

以上が、われわれのネットワーク・ワークショップが始まる前に、わたしたちを悩ませていた問題なのです。そして実のところ、同僚らがワークショップの前に送ってくれた参考文献からはつきりと読み取れたように、われわれはだれもが、この「ネットワーク」という主題に対して異なる理解をしていたのです。しかし、われわれの心配は杞憂であることがわかりました。そして「ネットワーク」は「グローバルな中世」を考察する方法として大変便利なものであることがわかったのです。それはどの点なのでしょう。

理由の一つは、「ネットワーク」に対する個々の考えがどのようなものであれ、それは、それぞれの専門とする地域にとって通用するとすべての同僚が感じていた考えで

あったからです。「帝国」や「分岐」の場合がそうであったように、「ネットワーク」は世界のいかなる地域も排除する用語ではありません。「ネットワーク」がかくも包摂的である理由は、たいへん幅広いエビデンスをつうじての検証を受けてきたからだとわたしは考えています。わたしたちはことを進めるのに記述史料を必要としませんでした。

「ネットワーク」が機能するさらなる理由は、わたしたちが「ネットワーク」をその従来の意味で用いないように決めたからです。わたしたちは意図的に、通常の「ネットワーク」テーマにまつわる議論を組織しませんでした。言い換えれば、わたしたちは、交易によるつながり、知の交換、移民、内部グループ・外部グループによる社会的ならびに政治的相互交渉などに関する独立したセクションを設けなかったのです。そのかわりにわたしたちが組織したワークショップは、以上のようなより一般的なカテゴリーを横断する、一連の異なるトピックを扱ったのです。かくしてわたしたちの関心は、いかにして「ネットワーク」が境界の内部で稼働し、境界を越えうるかだけではなく、それが境界を強化しもしくは創造するのかにについて考えることを目的として、ネットワークと境界との間の関係だけでなく、「ネットワーク」が果たす機能に向いたのです。わたしたちは、わたしたちが「ネットワークのダイナミクス」と呼

ぶものについても考察しました。その際強調したのは時間についてです。つまり、いかにして「ネットワーク」が空間を通じて機能するかだけではなく（これは通常われわれが「ネットワーク」で想定しているありかた、つまり「ネットワーク」を「マッピング」しようとする傾向について考える）、いかにしてそれが時間の経過につれて機能するかを考察したのです。このような類の分析アプローチは、主として交易、商業、移民を専門とする研究者が、そのような「ネットワーク」へのアプローチが政治的、社会的行動を説明するのにより関心のある研究者とこの用語を議論することを可能にしてくれるという点で決定的なのです。

わたしたち中世史グループの論題として「ネットワーク」が機能する最後の理由は、この概念がもつ星雲のごとき性質によるものです。言い換えれば、わたしが先ほど整理した定義の問題はいずれも、障害物ではなく役に立つ出発点となるようです。わたしたちすべてが非常に一生懸命はたらく必要があった結果として、特定の地域において「ネットワーク」で意味していたものを記述し定義することが可能となるという事実は、しばしば「ネットワーク」というラベルの背後に隠されたままになっている、「結び目」(node)、「ハブ」(hub)、「接続」(connection)、「接

触」(contact)、「共同体」(community)、「世界システム」(world system)といった個別のアイディアの多くが浮かびあがってくることをも意味します。これらのアイディアのいずれも同じものではありません。そして大変長期の間と異なる地理空間をつうじてこうしたアイディアについて語ることにより、わたしたちは、「ネットワーク」に関連する語群とアイディアをいかにして利用するのかという点について、注意深くなる必要があると理解しました。すくなくとも、わたしたちの誰もが、わたしたちが最初想定していたよりもはるかに豊かで複雑なアイディアの連鎖が「ネットワーク」という用語にはあるのだということを実感してワークショップを終えたのです。

しかしわたしたちがワークショップから得たものといえれば注意深くなる必要性を意識しただけ、などと言おうとしているわけではありません。そうではなくわたしたちは、「ネットワーク」はその複雑かつ多様な意味のすべてにおいて、きわめて有効な道具であると理解したのです。あらゆる程度のレベルとスケールで、あらゆる種類の中世社会の内部、そしてその間で、接続と比較双方について語ることは有効でした。

たとえばわたしたちは、世界の一部を特徴付ける「ネットワーク」の種類はその他の種類と非常に類似しているこ

とがあり得ることを発見しました。そのため、初期中世スキャンディナヴィアとヴァイキングの拡大を専門とするわたしたちの同僚は、アフリカ、とりわけアフリカ東海岸と西アフリカのサヘル地域を専門とする同僚によって議論されてきた証拠と多くの点で類似していることがわかりました。いずれのコンテキストにおいても、セアン・シンベックが「小さな世界」と呼ぶ、極めて高度にローカライズされた接続が、より長距離で、より脆弱な「ネットワーク」²⁸によって結び付けられているという証拠があったのです。後者の、長距離で、狭く、「華奢な」ネットワークを移動するひと（商人、職人、技術者）の数は、極めて限られる傾向がありました。多くの点において彼らは、彼らが移動するローカル・コミュニティにおいては「よそ者」でした。彼らがカバールする地理範囲はきわめてはりつめていました。つまり、彼らはあちこちに散在する結び目の間を、もしくはそこを伝いながら移動しがちでした。それにもかかわらず、そのような「華奢なネットワーク」は時として非常に広大な地理空間、たとえば東アフリカからペルシャを経て東アジアをつなぐことを可能にしました。そのような国際的なつながりは時として定期的に往来があり、その程度も激しいものであったかもしれませんが、時として全く機能しなかったかもしれません。

もちろん以上の事例は初期中世のもので、この時代にあった「小さな世界」と「華奢なネットワーク」は、その後の時代には、極めて多様なあり方で展開しました。さしあたりわたしたちの認識では、「接続」は、時代を経るうちに多層化し、多様化し、激しくなっていくものです。しかしこのような意味での時間の経過にわたった展開が真実だとすれば、わたしたちが「グローバルな中世」に関して極めて特定の何かを診断するために、「ネットワーク」のようなダイナミックで流動的な現象を利用することができるような意味は存在するのでしょうか。おそらくわたしたちは、五〇〇年から一五〇〇年の間に多くの異なる「ネットワーク」があったということができるのでしょう。しかしわたしたちは、このような異なる種類の「ネットワーク」が「グローバルな中世」を、決定的な特徴を持つ特定の時代に持たしたということができるとはどうか。これこそが、「ネットワーク」とグローバルヒストリーとの関係についての思考を推し進めるべきであるとすれば、わたしたちのグループがさらに考える必要のあることです²⁹。しかし、今の所、わたしは、「ネットワーク」と関連しつつ、グローバルな中世史にわたしたちをより近付けさせるかもしれない考えで結論をしましょう。その考えはローカルな経験とグローバルな経験をつなげます。というのもわれわれのグ

ループが観察してきたところでは、ひと、もの、思想が移動する間、その時代の大部分の間、中世世界のかなりの距離、移動するひとやものの方向、活動、利用は、大変ローカルな需要、とりわけ地域有力者の需要によって支配されていました。わたしたちが想起し得るのは、九世紀のコツラムで特権を商人共同体に与えた在地リーダーです。同様に驚くべきは、地域の需要がエキゾチックな産品さらには異郷のひとびとの利用や意味を容れ得るそのあり方です。かくして、東アフリカのキルワではステータスシンボルとして、数多くの中国産陶磁器が壁に埋め込まれているのです。同様に興味深いのは、カステイリヤ王アルフォンソ一〇世による『遊戯の書』は、国際的に認知されたチェスと呼ばれる遊戯についての書ですが、一三世紀イベリアにおける競合的政治的風景というきわめてローカルなコンテクストで意味を持ち得る、カステイリヤ王権の特権的地位を体現するものでもあるのです。

このように「在地民による現地風受容」(domestication of the local)こそが、われわれ同僚一同がさらに探求しようと躍起になっていることなのです。ローカルとグローバルの間でのパワーバランスが変化し始める時代はあるのでしょうか。グローバルを支配しつなげるよりも、ローカル

がグローバルによって定義され再形成されはじめるときはあるのでしょうか。そのときというのは、国際的ならびにトランスリージョナルな接続が加速しはじめ、一四九二年のコロンブスの航海もそうした加速の一つのあらわれにすぎないような、一三〇〇年以降の中世末期なのでしょう。それとも中世においても、さらにのちの時代においても、グローバルを決定するのは常にローカルなのでしょう。結局のところローカルとグローバルの間のバランスは、われわれが想定しているよりも不安定であることが常なのです。わたしが語っている今現在(本講演は二〇一六年七月二〇日)は、イギリスがEUを離脱する決定を下してから一ヶ月後であり、イギリス人が孤立を望んで「グローバル」なつながりを全て断ち切ってしまうために離脱に投票したのか、ただ、別の形より優位に立つある種の「グローバル」な私たちを選択したのか、はつきりとしません。「中世」に立ち返れば、中世の後期において「接続」の密度が上がることは、支配者、移動者、消費者、信仰者、そして個人に、選択の幅を増やしたのでしょうか、それとも減らしたのでしょうか。「移動」はチャンスを開くのでしょうか、それとも閉じるのでしょうか。移動と相互接続ほどの程度個人と共同体、そしてそれらの自己意識の感覚を規定するのでしょうか。

以上は、とりわけ「中世」に関する限り、回答を与えるどころか、未だ提起すらおぼつかない問題群です。これらもそもそ正しい問いであるのかどうか、その回答はどのようなものでありうるのかについてみなさんのお考えをおききたいのです。わたしは家族、筆記、もの、時間と空間の観点から、後深草院二条が自らのその苦境を規定しようとしているように見える箇所にななさんを振り向かせることで講演を終えたいと思います。あるいはこれこそが、地球規模にせよ個人レベルにせよ、中世のグローバルヒストリーがもつ、複数のレベルを組み合わせることが可能なテーマなのかもしれません。

折節、筑紫の諸卿といふ者が、鎌倉より筑紫へ下るとて、京に侍りしが、聞き伝へて取り侍りしかば、母の形見は東へ下り、父のは西の海を指してまかりしぞ、いと悲しく侍し

する墨は涙の海に入ぬとも流れむ末に逢ふ瀬あらせよ

など思ひつづけて、つかはし侍き。分

本講演は、二〇一六年度立教大学招へい研究員として本学に滞在したキャサリン・ホームズ博士により、二〇一六年七月二〇日に立教大学池袋キャンパスで開催された公開講演会「グローバルな中世問題とテーマ」の報告原稿である。

本稿の作成にあたっては、村田光司（名古屋大学高等研究院特任助教）に貴重な意見を頂戴した。いうまでもなく本稿における情報や訳語の選択は訳者の責任に帰するものである。

註

- (1) 例を挙げると、Jerry Bentley, “Early modern Europe and the early modern world”, in Charles H. Parker and J. Bentley (ed.), *Between the Middle Ages and Modernity: Individual and Community in Early Modern World*, Lanham, MD, Lawman and Littlefield, 2007; J. de Vries, “The limits of globalization in the early modern world”, *Economic History Review*, 63 (2010), pp. 710-733.
- (2) とはぐえ、時系列上のパラメータは常に流動的であった。わたしたちの議論が三〇〇年から一六五〇年までの幅のものを扱った。
- (3) <http://globalmiddleages.history.ox.ac.uk/>、ロークションズの報告を掲載したこのウェブサイトの他に、中間報告として、オンライン雑誌 *Medieval Worlds* に掲載した中間報告を参照。Catherine Holmes and Naomi Standen, “Defining the Global Middle Ages”, *The Medieval Worlds*, 1 (2015), pp. 106-117. このプロジェクトの最終的な成果は、Catherine Holmes and Naomi Standen ed., *The Global Middle Ages, Past and Present Supplement Series* 13, Oxford, Oxford UP, 2018.
- (4) Marshall G. S. Hodgson, “The interrelations of societies in history”, *Comparative Studies in Society and History*, 5 (1963), pp. 227-25. [reprint *Rethinking World History*, Cambridge, Cambridge UP, 1993, chapter1]; Marshall G. S. Hodgson, *The Venture of Islam: Conscience and History in a World Civilization*, 3vols., Chicago, Chicago UP, 1974; Janan Abu-Lughod, *Before European Hegemony: The World System AD.1250-1350*, Oxford and New York, Oxford UP, 1989. [佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳『ヨーロッパ覇権以前 600年間の世界システム』上巻、岩波書店 二〇〇一年]
- (5) Mark C. Horton, “The Swahili corridor: In the 10th century Swahili coast forged a route that brought gold, ivory and quarts to Europe. Their efforts contributed to the flowering of the Middle Ages”, *Scientific American*, 257-3 (1987), pp. 86-93.
- (6) Victor Lieberman, *Strange Parallels. Southeast Asia in Global Context, c.800-1830*, 2vols., Cambridge, Cambridge UP, 2003.
- (7) この提示されたグローバルな交流の証言に関する詳細な文献目録は、Catherine Holmes and Naomi Standen, “Introduction. Towards a Global Middle Ages”, in Holmes and Standen, ed. *The Global Middle Ages*, pp. 1-44. *The Global Middle Ages* の introduction 部分に刊行された材料を再び再利用するための許可を与えられた *Past and Present* の編集部ならびにオックスフォード大学出版局に対して感謝を申し上げます。
- (8) 大英図書館の「国際敦煌学プロジェクト」(The International Dunhuang Project) に関しては大英図書館のサイト (<http://idp.bl.uk/>) を「テイラー・シホーター・ゲンザ研究ユニット」(The Taylor-Schechter Geniza) に関するケンブリッジ大学図書館のサイト (<http://www.lib.cam.ac.uk/collections/departments/taylor-schechter-genazah-research-unit>) を参照せよ。

グローバルな中世 問題とテーマ (ホートズ)

- (9) 二〇一六年七月二〇日、東京大学本郷キャンパスにて開催された講演「Byzantium Transformed? New Directions for the Study of Byzantium (600-1500) in the Age of Global History」。若干の修正を経て、キヤサリン・ホートズ(和田光司(訳))、小澤美(解題)「変容するビザンチン・ローマン・ポストリーの時代におけるビザンチン研究の新潮流(六〇〇―一五〇〇年)」『思想』二〇一八年号、二〇一七年、八七―一〇七頁、ウェブ刊行された。
- (10) Daved Bates and Robert Liddiard, *East Anglia and the North Sea World in the Middle Ages*, Woodbridge, Boydell, 2013.
- (11) 大英図書館のプロジェクトサイト(https://www.britishmuseum.org/research/research_projects/all_current_projects/the_copper_plates_from_kollam.aspx) ; Elisabeth Lambourn, K. Verluthat, and R. Tomber, *The Kollam Plates in the World on the Ninth Century Indian Ocean (An Experiment in Large Micro-History)*, New Delhi, forthcoming.
- (12) 文献目録と報告を含む詳細は、次のサイト(http://globalmiddleages.history.ox.ac.uk/?page_id=105)を参照せよ。
- (13) ホンナン・ハンジャーナンドと Robert I. Moore, “The first Great Divergence”, *Medieval Worlds*, 1(2015), pp. 16-24.
- (14) Victor Lieberman, “Transcending East-West dichotomies: State and culture formation in six ostensibly disparate areas”, *Modern Asian Studies* 31-3 (1997), pp. 463-546. その註脚には Lieberman, *Strange Parallels* を参照。
- (15) Timothy Reuter, “Medieval: another tyrannous construct”, in *Medieval Politics and Modern Mentalities*, ed. by Janet Nelson, Cambridge, Cambridge UP, 2006, chapter 2; Daniell M. Varisco, “Making “Medieval” Islam meaningful”, *Medieval Encounters*, 13 (2007), pp. 385-412; K. Davis and M. Puett, “Periodization and “The Medieval Globe”: A conversation”, *Medieval Globe*, 2 (2006), pp. 1-14; Robert I. Moore, “A global Middle Ages?” in J. Belich et al. eds., *The Prospects of Global History*, Oxford, Oxford UP, 2016, p.81 を参照。
- (16) ローン・ヒューズ「記録の時代」(http://globalmiddleages.history.ox.ac.uk/?page_id=245) と「表紙解説」(Graphic environment) に付するキヤロリン・ヒューズ・グーハマンの寄稿を参照。
- (17) トンナー・マインツと題しては <https://www.ucl.ac.uk/african-studies/people/dr-matthew-davies> を参照。
- (18) Kirsten Seaver, *The Frozen Echo. Greenland and the Exploration of North America, ca. A.D.1000-1500*, Stanford, CA, Stanford UP, 1996.
- (19) リードの考えを基に推し進めた区画として、Holmes and Standen, “Introduction. Towards a Global Middle Ages” in *The Global Middle Ages*, pp. 1-44.
- (20) David A. Bell, “This is What Happens When Historians Overuse the Idea of Network”, review in *The New Republic* (October 26, 2013).
- (21) Nigel Saul, *Knights and Esquires: The Gloucestershire*

- Gentry in the Fourteenth Century*, Oxford, Oxford UP, 1981; Simon J. Payling, *Political Society in Lancastrian England: The Greater Gentry of Nottinghamshire*, Oxford, Oxford UP, 1987; Simon K. Walker, *The Lancastrian Affinity, 1361-1399*, Oxford, Oxford UP, 1990; Christine Carpenter, *Locality and Polity. A Study of Warwickshire Landed Society, 1401-99*, Cambridge, Cambridge UP, 1992.
- (22) John Padgett and Christopher Ansell, "Robust action and the rise of the Medici, 1400-1434", *American Journal of Sociology*, 98-6 (1993), pp. 1259-1319.
- (23) Hilde de Weerd, "Communication and Empire : Chinese Empires in Comparative Perspective (<http://chinese-empires.eu>)"
- (24) http://globalmiddleages.history.ox.ac.uk/?page_id=142
- (25) Soren M. Sindbak, "The small world of the Vikings. Network in early medieval communication and exchange", *Norwegian Archaeological Review*, 40 (2007), pp. 59-74.
- (26) 我々の最終的な刊行物には初期中世だけでなく後期中世をも繋げるネットワークに関する論考も収録されている。Jonathan Shepard, "Networks", in *The Global Middle Ages*, pp. 116-157.
- (27) 三角洋一校注『新日本古典文学大系五〇とはずがたり・たまきはる』(岩波書店、一九九四年)、二二七―二三八頁。(オックスフォード大学講師)